

最後のケア

私が受け持った患者は実習期間の終了を待たずに亡くなった。私は会話をすることもままならない患者を見ても、心のどこかで亡くなるとは思わず、患者本人の辛さや大切な人を亡くす家族の気持ちをよくわからないまま看護していた。

患者は痛みによる不眠と、身の置き所のない苦しさから、献身的に介護する妻に辛く当たっていた。私はその部屋に漂う空気感に耐えられないことと、痛がる患者に何もできない自分が嫌で、あまり訪室していなかった。患者と2人きりになったとき、「早く楽にさせてくれ」と私の目を見て静かに話した。私は、患者がどれほどの苦痛を抱えているのか考える余裕もなく、「まだまだこれからです」と励ましの言葉を笑顔で返した。返事に困るようなことを言って欲しくないと思い、患者の本音を聞くことから逃げた。

患者は日増しに状態が悪化していった。苦痛が強まる患者に、ケアをしているときだけでも安楽な時間をすごしてもらいたいと思い、温罨法や手浴をした。今日のケアはこの人にできる最後のケアだと思うようにと助言を受けていた。しかし、私は心のどこかでこの患者への看護は明日も続くと思っていた。ある日手浴をしていると、いつも無口で不機嫌そうな顔の患者が涙を流しながら「ありがとう」と言った。私は患者に少しでも安楽な時間を提供することができたと思い嬉しかった。その反面、こんなに喜んでくれるならもっと早くからすればよかったと後悔した。実習が終わる2日前の朝病室に行くと、そこには空のベッドがあった。私は最後に患者と家族に会えず、感謝の気持ちを伝えることもできなかった。

数週間後、患者の妻が「学生がいてくれて支えになった、ありがとう」と言っていたと聞いた。その瞬間、私は涙が止まらなかった。私はこの患者と家族に看護ができていたのか、私がしたことはよかったのか、ずっと心に引っかかっていた。それがこの言葉によって、未熟な私でも支えになることが出来ていたのだと救われた。

今でも私はこの患者の看護に後悔が残る。あの時「楽になりたい」という患者の本音になぜ向き合わず逃げてしまったのか、そして、死が迫り来る患者の苦しみに対してもっと何かできたのではないか。

しかし、あの日々がもう一度戻ってくることはない。患者は人生最後の時間をかけて本音に向き合うことの大切さに気付かせてくれた。これから出会う患者には、その本音から逃げずに、心から向き合う看護師になりたい。そして看護をするときは、後になってこうすればよかったと思うのではなく、今日のケアがこの患者にできる最後のケアだと思い、精一杯の看護をしていけるよう努力していきたい。